

富士紀行（4） 「宝永の砂降り」と須走の壊滅

今、陸上自衛隊富士学校が所在し、その勤務者や家族が生活し、学生が勉学に勤しむ須走が、一丈余（約3ト）の火山礫の上にあることを誰が想像出来ようか。

宝永の砂降りの影響は未だにあると思われる。富士学校秘書班長堂園3佐が借用している数坪農地は須走でも野菜のよく採れる珍しい所だそうである。その一角だけが幸いなことに土手で灰が堰き止められ、結果的に降灰が少ない地域だとのこと（幅20メートルの内奥10トはいかなる理由か地味が痩せているとか）で、野菜とがよく育つとのことである。お裾分けを頂いたが、極めて美味であった。

須走方面より眺めると左スロープの美しい山容に醜いコブシをこしらえ、その背後に大きな火口がある宝永山がはっきりと見える。これが「宝永の砂降り」として知られる宝永の大噴火の名残である。18世紀初頭即ち元禄から宝永の時代、日本列島は相次ぐ地震、津波、洪水、噴火と立て続けに自然災害に見舞われた。須走に関連するものだけでも元禄16年（1703）11月の南関東大地震、宝永4年（1707）10月の南海・東海大地震、それに11月の富士山噴火である。この後、宝永6年伊豆三宅島噴火、同7年浅間山噴火と続いている。

有史以来、噴火頻度の高い三宅島、伊豆大島、浅間山、富士山は連動しているのではないかとも思われる。そう言う意味においては、最近の伊豆諸島群発地震を見るに心中穏やかならざるのは私のみではあるまい。

11月23日、前夜の30回を超える地震等の予兆に引き続き辰の刻、大地が鳴動、西方より起きた黒雲忽ちにして上天を覆い、雷鳴が激しく轟いた。手鞠ほどの焼け石や砂が須走村他富士山東麓の村を情け容赦なく襲ってきた。真昼というのに暗く、砂は12月8日に至ってようやく止んだと言われる。降り注ぐ火山弾によって浅間神社主小野大和守の家が焼失したのを始め37戸が消失、潰れた家は寺院を含め39戸を数えた。降灰量は記録によると「1丈3尺（3ト9サ）」或いは「平地1丈2尺（3ト6サ）」とも言われる。

○問題：では、この時排出された岩石や灰は一体どの位の量であったろうか？
一説には13億トンとも言われている。

何れにしても焼け残った家々もすっぽり砂に埋もれてしまったのである。12月9日には噴火口付近に新山が生まれているのが確認された。宝永山である。

この宝永の噴火は駿河の国のみならず江戸にも甚大な降灰の影響をもたらした。23日の午の刻頃か俄に黒雲がたなびきたると見るや忽ちの内に天を覆った。八ツ頃から鼠色の灰が降り始めて次第に激しさを増し、後に黒砂が夕立のように屋根を叩いた。江戸中は真っ暗闇になって、新井白石は燭を掲げて抗議をした（白灰地を埋めて草木皆白く、御前に参るに天甚だ暗かりければ、燭を挙げて講し侍る）と言い、光を失って怪我をした者も続出したとも書かれた本がある。